おらんだ人形（一幕）

池谷信三郎

青年A
青年B
女。

都會の郊外。

或るアパアトメントの一室。
青年Ａの部屋。
窓の向うに立木の梢が見える。
夕暮近くの弱い秋の陽差しが差してゐる。

1

青年Ａ、窓から戸外を見下してゐる。
ノックの音。

Ａ　（ふり返つて、女の人に話しかけるやうな調子で、）誰あれ？
Ｂ　俺だ。
Ａ　……
Ｂ　（戸を開けて、）這入つてもいいか？
Ａ　いいさ。

B　（這入つて來る。）氣の毒したな。
A　何故だ？
B　俺でさ。
A　下らん事云ふな。
B　何をしてたんだ？　窓邊なんかに、しよんぼり立つて。
A　落葉を嚙んでたんだ。
B　淋しい奴だな。
A　馬鹿をいへ！
B　俺は銀座を歩いて來た。人混みの中をね。
A　淋しい奴だな。
B　君も少し街へ出て笑へ！
A　俺はどこでだつて笑へる。

Aは窓を離れ、兩人は適宜な椅子に坐る。

B　（煙草に火をつけ乍ら、）あの女（ひと）に會つたよ、銀座で。
A　……

B　資生堂の前だ。誰か戀人と歩いてゐた。

A　俺が昨日さう云つてやつたのだ。たまには、誰か昔の戀人と歩いたらどうだつて。……

B　身長（せい）の高い、スマアトな洋服を着た紳士だ。

A　氣持が新鮮になつていいだらうつて。

B　買物の包みを澤山持たされてさ。

A　揉上を長く伸ばしてゐる男だらう？

B　さうだ、いい顔をしてゐる。裕福さうで。

A　吉田さんて云ふのだ。よく話を聞くよ。寫眞も見せて貰つた。

B　あの女（ひと）が、人を輕蔑する癖を習得した幾多の材料の一人なんだらう。

A　君よりは偉いさ。輕蔑されてゐる事を知り乍ら、買物の包みを持つてやるんだからね。君にはそんな雅量はないだらう。君はそつぽを向いてるぢやないか。

B　俺がそつぽを向いてるのは意味が違ふんだよ。初めてここであの女（ひと）に紹介された時、これはいかん、と俺は思つた。すると俺の心の中に祕んでゐた悲しい癖が頭をもち上げた。俺は何か魅力を感じる女性を見ると、どうかしてその女の中に、何か知らん、缺點（アラ）を見つけ出さないと心が落着けないのだ。

A　（默つて聞いてゐる。）

B　君も知つてゐるだらう。俺には以前（もと）、美しい隱やかな戀人があつた。

A　ああ知つてゐる。何日(いつ)だつたか築地で會つた。

B　あの時分、俺は夢中であの女を戀してゐた。だから、他に美しい女性を見ると、俺の心はひどく亂れて憂鬱になつた。それでどうしてもその女の中に、何か俺の戀人よりも劣つた缺點(アラ)を見つけ出す迄は、氣がすまないのだ。それが見つかると、俺は朗らかな明るい氣持になれた。

A　……

B　（話し續けて、）その癖が俺の天性になつて了つたのだ。あの女(ひと)を見た時もそれだつた。俺はやつと、あの人が、やたらに人を輕蔑すると云ふ缺點(アラ)を見つけて、それで安心してそつぽを向いた。いつ迄もあの女が不愉快な印象で俺の心の中に殘つてゐるやうに。別れた戀人の夢を亂さないやうに。

A　君は不親切な奴だな。俺はその點であの女に同情してるんだ。あの女はあの癖の爲に、希望がなくなつてるのぢやないか。世の中が輕蔑さる可きもので滿たされてゐる時、どこに明日(あした)の望みがある？　だから俺はかうやつて、ここに輕蔑されない一つの存在があるから、安心をしろと云ふ事をあの女に示してゐるんだ。

B　それだけに君は惚れてゐるのだ。

A　馬鹿を云へ。惚れてゐる位なら喜んで輕蔑されてやる。その方が餘つ程樂だからね。君こそ惚れてるんだ。

B　俺は嫌ひだ、あんな女。ただ、君が常にさう稱してゐるから、君の尻馬に乘つてゐると思はれるのが嫌やで默つてゐるんだ。

A　だつて、君は、あの女が西洋將棋（チェッス）を教へてくれろと云へば、二時間でも三時間でも、ものぐさな君が、きちんとお相手をしてるぢやないか。

B　それはただ、あらゆる女性に對する俺の禮儀だ。貞淑な夫人（おくさん）に賴まれたつて、やつぱりさうする。

A　貞淑な夫人か。（輕く笑ふ。）

B　殊にあの女は、男性に對する禮儀を知らんから、こと更にさうする。あの女は何かの拍子に、ひよつと眼が合つたりすると、ぢいつとこつちの眼を見返してゐるぢやないか。あんな風に人ばかり輕蔑してゐるから、あの女はやたらに人に惚れるんだ。

A　あの女は人に惚れやしないよ。

B　いや惚れる。現に君に惚れてゐる。あんなにしよつちゆう喧嘩ばかりしてゐて、それでゐて離れられないんだからね。

A　馬鹿を云へ！

B　いいや、惚れてる。惚れてる。惚れてる惚れてる。……

A　止せ。下らない。

Aは立上つて窓邊へ行く。

B　口癖迄うつつてるぢやないか。（口眞似て、）下らない。

Bも立上つて、今度は右側の壁に沿つて置かれた寢そべり臺に腰を下す。ポケットから黑い小さな三つの木の玉を取出し、手品師のやうに、指の間に入れて、二つにしたり三つにしたりしてゐる。

どこからかピアノの音がもれて來る。靜かな明るい曲が良い。

間。

A　（暫らく聞き入つてから、）秋――か。

B　（やや皮肉に、）秋――か。

A　（反撥的に、）秋さ。

又兩人聞き入つてゐる。

Bは無心に玉の手品をやつてゐる。

間。

Ｂ　鈴木さんの奥さんだね。

Ａ　（戸外を見たまま、）さうだ。

Ｂ　あの人は明るいね。いつでもにこにこ笑つてるぢやないか。

Ａ　戀愛をしない人達は皆んな明るいんだ。鈴木さんの旦那には他に愛人があるんだよ。だから、あの夫人はもう夫を愛する必要がないんだ。一日ピアノを弾いて、……

Ａはふり返つて、ふと、Ｂが木玉をいぢつてゐるのを見る。

何んだ、そりや？

Ｂ　まあ見てゐろ！（三つの玉の手品をやつて見せる。）二つだらう。えい！　ほら、三つ。三角關係と云ふ奴だ。一人の女を二人が愛してゐる。一人があきらめて、ほら、消えた。又現れる。今度はひとりで街を彷徨く。……

Ａ　面白いね。どうしたんだい？

Ｂ　昨日銀座で買つたんだ。

Ａ　中々うまいね。

B　俺は今日一日、部屋の中で練習したんだ。
A　たつたひとり、部屋の中で、そんな事してたのか？
B　ああ。
A　人間はひとりでゐると皆んなそんな事をしてるんだね、何かしら。
B　君は落葉を噛み、あの女は、……
A　又あの女か。
B　あれはどうしてるんだらうね。……爪を磨いたり、……
A　鸚鵡（あうむ）に唱を教へたり。羊に昔の戀人の手紙を食べさせたり、……淋しい女だね。

Aは煙草を出して吸ふ。

B　（さつきから煙草を御へてゐて、）燐寸（マッチ）。
A　（燐寸を渡し乍ら、）あんないつも華やかな服装（なり）をしてゐて、陽氣にはしやいでゐ乍ら、どうかした拍子に、ぢいつと凝視（みつ）めてゐると、まるで俺は淋しさと睨めつこしてゐるのぢやないか、と思ふ事がある。まだ暗くなりきらない夕暮の街に、ぽつんと、一つともつてゐる灯火（ともしび）のやうな氣がする。あの女は眞空を持つて來るのだ。あの女が這入つて來ると、部屋の中に妙な淋しい空虚が出來る。

Ｂ　どうして俺達はこんなにあの女の事ばかり話すんだらうね。ことに依るとあの女に好意を感じてゐるのかも知れないぞ。

Ａ　俺達は頭が疲れて、退屈なのだ。……好意を感じてゐる？　馬鹿くさい。簡單にものを見る奴だな、君は。心の鍛へが足りないよ。

Ｂ　さう高踏的なものの云ひ方をするな。俺は俺自身思つてゐる程偉くはないかも知れないが、君が思つてゐる程馬鹿でもないつもりだ。

Ａ　俺はただ、あの女を幸福にしてやらうと思つてゐるだけなんだ。

Ｂ　この女を幸福にしてやれる。とさう心に思つたら最後、その男はもうその女に對して駄目だね。

Ａ　駄目か駄目ぢやないか知らないが、俺は今、それでひつかかつてゐるんだ。惱んでゐるんだ。

Ｂ　人間は自分が今惱んでゐる惱みが、一番大きく深刻なものだと思ひこみたがるもんだね。それをこれ人間の悲愴癖と云ふ。

Ａ　君の方が餘つ程高踏的なものの云ひ方をしてるぢやないか。

Ｂ　俺は今、どうしたらこの玉の手品が、手際よくやれるか、それが俺の惱みだ。どうだ、深刻だらう。ほら二つ。……

Ａ　止してくれ。俺は胸がつまつて來た。

Ｂ　（無心に手品をやつてゐる。）

間。

A　どうして俺達はかういらいらしてるんだらうね。

B　俺達にも輕蔑癖がうつつたのだ。

A　秋だからだ。秋は頭が疲れる。

B　さうだ。

A　環境が寂然（ひつそり）として靜まるから、頭の中が細かく動くんだ。それで疲れるんだね。

B　疲れてるね、お互ひに。

兩人沈黙する。

間。

ピアノの音がやがてやむ。

B　おい。

A　……

B　おい。

A　何んだ。

B　何か喋ってくれ。

A　お互ひに自分に向つて喋らうぢやないか。秋の宵にふさはしいやうにね。

B　そんな利己主義な事を云はずに何か喋つてくれよ。俺は自分に喋る事なんか何んにもありやしない。だから、しよつちゆう君の部屋へ、かうして邪魔しにやつて來てるんぢやないか。

A　それだけの爲か？

B　當り前さ。

A　そんなに強がらなくたつていいよ。

B　別に強がつたりなんかするもんか。

A　ハハハ。所で何時かな。（時計を見る。）

B　心配なのか？

A　下らん。

短き間。

B　もう止さうぢやないか。

何を？

Ａ　お互ひにさぐりを入れたりするやうなものの云ひ方は。

Ｂ　何時だつたんだい。

Ａ　（もう一遍時計を出して見て、）六時ちよつと過ぎてゐる。

間。

はつきり云つてやらうか。

Ｂ　ああ。

Ａ　（ぶらぶらと本棚の方へ歩いて行く。）要するに俺の感情は、憎惡（にくしみ）と愛情の間を縫ふ針なのだ。

本棚の上には小さな木彫りの和蘭（オランダ）人形の男女が飾つてある。

Ａはそれを無心にいぢつてゐる。

時々俺はひよつとした拍子に、こりや俺はこの女を愛してるんぢやないか、とさう思ふ事がある。するとあの女は直ぐ俺を輕蔑し始める。

さう云ひ乍ら、Ａは、丁度人形芝居でもするやうに、和蘭人形の女の方を、高く上げて、男の方を見下す眞似をする。

俺はますます可哀さうになつて來る。こりやゃいかんと思ふ。この女を救つてやらなくつちやいかん。そこで俺は表面に冷淡を裝ふ。愛すれば愛する程冷淡になつて行く。そのうちにそれが段々慣れて來ると、心迄も冷淡になつて行く。すると、ことさらに骨折つて冷淡にしてゐるのが馬鹿くさくなつて了ふ。終ひに今度はあべこべに憎くなつて來る。憎くて憎くてたまらなくなつて來る。

男の人形をどしんとさせる。

それが、表に現れて來る。俺は極端に憎惡（にくしみ）を投げつけてやる。するとあの女は急に、俺を尊敬し始める。

女の人形を男の人形の前に跪かせる。

俺はほつと安心する。又可哀さうになつて、愛情を覺える。

男女の人形を合はせる。

すると女が又俺を輕蔑し始める。……さう云つた心の過程を、俺はあれと一緒にゐるとしよつちゆう繰返してゐるんだ。お互ひに反撥し合ひ、……

B　いつ迄も喧嘩をし續けて行く。

A　いいや、俺達は結局別れると思ふ。

さう云つて、Aは男女の和蘭人形を本棚の両端へずうつと離して了ふ。

B　どうしてだ？

A　人間は感情だけぢや結合して行かれんからな。男と女を結ぶ大きな楔（くさび）が缺けてゐるんだ。不幸な事にねえ。

B　と云ふと。

A　全然さう云ふ魅力がないんだ。身體のねえ。

間。

俺達は結局同じ心の過程を繰返して行くうちに、神經をお互ひに擦りへらして、退屈だけが、丁度雨に洗はれた木の木目のやうに殘るんだ。別れる時の最後の印象で、俺達は離れ乍ら、お互ひに愛し合つてゐるか、憎しみ合つてゐるかが分れるんだ。かうか、（人形を離したまま向ひ合せて、）かうか、ねえ。（今度は背中を向き合せて置く。）

この時、黒い木の玉がBの手から落ちて、飄々と床の上を轉つて行く。

兩人でぼんやりそのあとを見送つてゐる。

間。

A　暗くなつたね。

Aは又窓の方へ歩いて行く。

B　ああ。（立上る。）燈火（あかり）をつけようか？

A　（うなづく。）

B　（電燈をつける。）

Ａ　月が出たね。あすこの並木の道が白く光つてゐる。
Ｂ　（玉を拾つて、）邪魔しちやつた。失敬するよ。
Ａ　（ふり返つて、）いいぢやないか。今、紅茶でも入れるから。
Ｂ　俺も部屋へ歸つて月でも見たくなつた。
Ａ　さうか。ぢや。
Ｂ　ああ。
Ａ　川村の小説ぢやないが、明月を食べてお腹（なか）をこはさないやうにしてくれ。
Ｂ　大丈夫だ。

Ｂは歸つて行く。
Ａはいらいらと部屋の中を歩き、煙草に火をつけたり、Ｂの部屋へ行かうとしたりする。
やがて又窓の所へ行く。
その時、下で自動車の音が幽かに聞える。
Ａは耳をすませる。
窓から見てゐる所を見られるのが嫌やだ、と云つた風に身をひいて、右側の壁に沿つた寢
そべり臺に腰を下す。横になる。煙草の煙を輪に出して、天井へ吹きかけてゐる。

2

女　（默つて這入つて來る。）

若くて美しく、細おもてで、紫がかつた着物に臙脂の裏をつけた、明るい服装（みなり）。上品な趣味が匂つてゐる。が、ぢいつと見てゐると、どこかに救はれない淋しさがある。

眞白な毛皮の襟巻と買物の包みを卓子の上に置き、ソファに投げるやうに身を落す。

女　疲れちまつた。

A　おそかつたですね。

女　あの方が自動車で送つて下すつたのよ。吉田さんが。今別れた所。

A　さう？　そりやよかつた。

女　（坐つたまま、黒の絹の手袋を外し、チョコレエトの箱を開けてゐる。）

A　久しぶりで舊交を溫めたと云ふ所ですね。

女　皮肉？

A　皮肉だ？　何んの爲に。

女　少しは嫉いてるんでせう？

Ａ　馬鹿云つてゐる。

女は身體を起す。

女　何んて頼りない人なんだらう。

Ａ　嫉妬が戀愛に幸福を齎(もたら)すなんて云ふ考へはね、ありや十九世紀の遺物ですよ。博物館へでも行かなくつちや……、

女　澤山よ。愛してもゐない癖に。

Ａはぢいつと女を見てゐる。

段々愛情を感じて來る。

Ａ　（優しく、）煙草を吸つちやいけなかつたんですね。ごめん。（立上る。）

女　いいのよ。どうぞ。

Ａは女の方へ寄つて行く。

パッカアドは揺れなくつていいわね。吉田さんはパッカアドを買つたのよ。

Ａ　さう？

女がチョコレエトを一つ食べて、Ａにも一つ渡す。

（受取り乍ら、）パッカアド。……

男が不意に燈火を消す。

月光が青白く窓からさしこみ、両人の影が影畫（シルウエット）のやうに浮ぶ。

男は又燈火をつける。

（獨り言のやうに、）駄目だ！

女　何あに？

Ａ　燈火（あかり）を消すと、香水の匂ひが鼻につきますね、妙に。

女　さうさう、香水つてば、今日ウビガンのケルク・フルウルを買つて來たのよ。ちよつと、とつて。（手を出す。）それ。

Aは卓子の上の包みをいぢる。

それそれ、いいえ、こつちよ。

A　これ？

女　ええ。

A　（渡す。）

女　（紙を解き、）いいでせう、この瓶？

女は瓶の口を開けて、突き出す。

Aが嗅いで見る。

秋の匂ひがするわね、これ。

A　香水を買ふ戀人。自動車に乘せる戀人。

窓の方へ行く。

女　ふん！

A　さしづめ僕なんか、看病をする戀人かな。

女　（軽蔑したやうに、）恩に着せなくたつていいわよ。

ハンケチに香水をふる。

今度はコンパクトを出して顔をつくろふ。

そのまま、ぢつと鏡を凝視（みつ）めてゐる。

鏡！（それから、朗吟するやうに、）

『愁によつてその縁（ふち）の中に凍りたる水よ、……』

（男に）あたし、時々夜中におそく、たつたひとりで鏡を見てゐる事があるのよ。（返事がないので男の方をふり返る。男が自分の云ふ事を聞いてゐずに、窓の外を眺めてゐるのを見ると、ふん！　と云つた顔付をして、コンパクトをビチャンとしまふ。又朗吟するやうに、）

『なんぢが底深き氷の下に沈みたる

落葉に似たるわが思出を求めつゝ、……』

A　（窓から外の夜を見乍ら、獨り言のやうに、）a road that leads no where.

女　（ききとれずに、）何あに？

A　どこへも行つてない道、つて云つたんです。

女　御苦労さまに飜譯して下すつたのね。

間。

Ａ　落漠たる秋の夜か。あの路は一體、どこ迄行つてるのか知ら？

女　（だるさうに立上る。）さあ？（窓の所へ行く。）

両人並んで窓の外を見てゐる。

Ａ　ことに依るとどこへも行つてないんぢやないか知ら？

女　そんな路つてないわよ。

Ａ　いいや。

女　あるの？

Ａ　ええ。

女　どこに？

Ａ　アイルランドに。

女　何あに云つてるの。

Ａ　ほんとさ。

間。

女　落葉がひどいわね、あすこの路は。車がカサカサつて鳴るのよ。足が濡れて了つたわ、夜露で。こんな。

女は足をまくつて見せる。

少し降りて歩いて見たの。あの人が歩かうつて云ふんですもの。

Ａ　毒ですよ、そんな事して。

女　あの人もやつぱり胸が惡いのよ。だから、あの人は、あたしと二人、永い間かかつて、じわりじわりと心中をしようとしてゐるのよ。きつと。

間。

井坂さんは？

Ａ　今しがた迄ここにゐたんだけど。

女　さつき銀座で會つたわよ。

Ａ　そんな事云つてた。奴さん夜店で變な手品を買ひこんで來てね。黑い玉を二つにしたり三つにしたりする、……

女　ああ、賣つてたわ。あの方も夜店であんなもん買つたりなんかなさるのね。やつぱり淋しいのね。

Ａ　あいつ、あなたの事を大嫌ひだつて云つてましたよ。

女　馬鹿にしてるわ。ふーんだ！　（内心ひどく自尊心を傷けられてゐる。）

Ａ　あんな人ばかり輕蔑したがる女は大嫌ひだつて。

女　あの人はね、自分が人に輕蔑されてゐるんぢやないつて證據を、自分に見せ度いのよ。

間。

だけど、……

Ａ　……？

女　ほんと？

Ａ　何が？

女　何がつてさ。

Ａ　ほんとですとも。

女　馬鹿にしてるわ。下らない。

女は卓子の方へやつて來る。

チェッスしない？

Ａ　（やや冷淡に、）してもいいです。

女が卓子に坐る。

Ａは西洋將棋をとり、卓子の上へ置き、女と向ひ合つて坐る。

暫く默つてやり始める。

Ａ　ほら、とりますよ。

女　ちよつと待つて、待つて、何んで？

Ａ　この騎士（ナイト）で。（駒を動かさうとする。）

女　（手で盤の上を掩ふやうに遮つて、）あら、待つて、待つて、待つてよ。ぢやこつちへやるわ。

又暫くやつてゐる。

女　あのさつきのお話して下さらない？

Ａ　何んの話？

女　アイルランドの、……

Ａ　ああ。（將棋盤を指して、）ほら、これがきいてますよ。

女　（考へて、）ええ、いいわよ。

Ａ　（ちよつと考へて、）ああ、さうか。とりかへつこか。（他の手を指す。ゆつくり低い聲で、將棋の方を考へ乍ら、話し始める。）アイルランドの地方はね、土地が痩せて、廣漠と荒れ果てた高原がずうつと續いてゐるんですつて。その間に、民家が丁度、ほら、君の駒みたいに、ぽつりぽつりとあつて、（女微笑（わら）ふ。）住民は皆んな疲弊してるんです。時々饑饉なんかがあると、そりや悲惨（みじめ）なんですつて。（駒の方を考へる。）

女　（それから？　と云ふ風をする。）

Ａ　そこで或る教區の牧師さんが、骨折つて、政府へ歎願書を出したんですね。すると政府はただお金を出す名目がないので、窮民に仕事を與へる爲に、その地方の高原の眞中へ、立派な道路を敷く工事を始めさせたんです。（駒をとる。）所が或る一定の豫算がなくなると、その

まま工事は中止になつて了ふ。……

女　（駒を動かし乍ら、）それで？

Ａ　それで、その荒れ果てた廣漠とした高原の眞中に、ずうつとあてのない道が、長く續いてゐるのです。

女　まあ！

Ａ　旅人が來て、この道はどこへ行つてるのかと訊くと、土地の人が答へる。nowhere.

女　（もう一遍、それから？　と云ふ風をする。）

Ａ　（獨り言のやうに、）どこへも行つてゐない。どこへも行つてゐない。いいぢやないですか。

女　（言葉に出して、）それから？

Ａ　それだけ。

女　つまらないわ。（同時にチェッスも止めて了ふ。）

女は立上つて又ぼんやり窓邊へ行く。行きしなに、本棚の上の和蘭人形を見る。それが離れてゐるのを見ると、ちよつと厭やな顔をして、又もとのやうに並べて行く。

男は駒をかたづけてゐる。

女はぢいつと窓の外を眺めてゐる。

男が煙草を吸ひ出す。

間。

やがて女の肩が心持揺れる。

女　（小さい聲で、）解つたわ。解つたわ。

Ａ　（少し呆氣にとられてゐる。）どうしたんです？

女　（幽かに泣き乍ら、）結婚なんて目的を考へなくても、あたし達は愛し合つて行けるのね。

Ａ　あたし達ぢやない。あんたがです。

女　（反撥して、）どうして、あなたはそんなにつめたいの？

Ａ　つめたい？

女　あなたは、何んの憎惡（にくしみ）も感ぜずに、あたしを離れる事が、お出來になるのね。

Ａ　（少し愛情を恢復して、）そんな、……

女　（ぢいつと男を見てゐる。急に自信を以つて、）厭や厭や、あなたはどうしてもあたしと結婚して下さらなくつちや。

Ａ　平凡な事を云ふですな。（この邊から又段々と男の態度が冷靜になつて行く。）

女　どうせ平凡だわ。平凡だわ。だから、あたしの平凡な考へなんか認めて下さらなくなつてもいいのよ。ただ、あたしがさう云ふ平凡な考へを持つてゐると云ふ事さへ認めて下されば。

Ａ　そんな平凡な考へは、近代的な素養に對しても恥づるがいいですよ。

女　あたしは近代人だなんて思つた事はなくつてよ。あたしのこの二の腕には大きな植疱瘡の痕があるの。だからあたし洋服なんか着た事はないわ。

Ａ　どつちにしろそんな事は無意義です。ものをはつきりさせる爲に、僕は少し露骨な事を云ひます。夫婦と云ふものはね、お互ひに身體の魅力があつて初めて意味をなすのです。さつき君は、足が濡れたと云つて、足をまくつて見せたでせう。僕には、それが赤子の手の平よりも無感覺なのです。僕はさつき電燈（でんき）を消しました。僕はまだ、闇に擴がる香水の匂ひに、花園の幻影を描いただけですもの。あなたは、……

女　下らない。

Ａ　下らなくないんです。

女　解つたわよ。うるさい！

女は軽く空咳をする。

両人默る。

女はぢいつと男を見る。その瞳の中には自暴の光が沈んでゐる。

男はますます冷静になつて行く。

Ａ　（立上つて、書机の本を取上げて讀む。又思ひ返してやめる。）

女　（鋭く、）何故おやめになったの？

Ａ　故意（わざ）とらしいからです。何んだか敵意でも持つてるやうにとられさうな氣がしたからです。

女　どうせさうなんぢやないの。あなたはもう退屈なさつてるの。あたしを憎んでらつしやるの。

女は又咳きこむ。

男は何か云ひかけて默る。

女烈しく咳きこむ。

Ａ　窓を閉めたらいいでせう。

女默つてゐる。

Ａ　（仕方なささうに窓を閉める。）

女　いいのよ。（いきなりその窓を開ける。）

Ａ　いけません。（又閉める。）

女又開ける。

男閉める。
女開ける。
両人爭ふ。

Ａ　（閉めて、）僕にはあんたの健康を心配する義務なんかないんですよ。
女　そんなら、なさらなけりやいいぢやないの。
Ａ　しなくてもいい事を、しなくちやならんから、肚が立つのです。
女　（閉めようと努力して、ひどく咳きこみ乍ら、）あなたに、あなたに頂いた、……健康を、……お返し、……お返しするわ。……
Ａ　馬鹿！

女を押しのけて、窓に鋲を差込む。

女　（よろけて、寢そべり臺に倒れ、熱と咳の爲に蒼白い顔を上げて、そのまま下からぢいつと男の顔を凝視めてゐる。）
Ａ　（憎惡をこめて暫く見返してゐる。）

さうやつて暫く兩人は顔を見合せてゐる。

間。

A　（突然、女の所へ飛んで行き、いきなり女の手を引張つて、今閉めた窓硝子の前に立たせる。）見給へ！　ここにうつつてゐる君の瞳を。こんな、こんなに明るく輝いてるぢやないか。

女　（ぼんやりと窓硝子を凝視めてゐる。）

A　（後ろから斜めに女の姿を見てゐる。その瞳が段々やはらいで行き、それが烈しい愛情にうつつて行く。）

女　（戸外の月夜の事とも、又自分の顔とも、どつちの意味ともつかず、）明るいわねえ。

3

その時、扉が開く。

青年Bが這入つて來る。

B　（兩人が並んで窓から外を見てゐるのを見ると、瞬間ちよつと暗い顔をして、又直ぐわざと陽氣に、）失敬、君ひとりかと思つた。

青年Ａと女はふり返る。

Ａ　構はないさ。

Ｂ　大分練習したよ、あれから。（女に、）先程は失禮。

女、會釋する。

面白いですよ。ご存知ですか？（ポケットからさつきの黒い玉をとり出して、）二つでせう。えい！　ほら、三つ。又二つ。今度は一つ食べて了ふ。（食べるやうにして、頰邊をふくらませ、）これこつちの手の平へ。ねえ。

Ａと女は顔を見合す。

Ｂ　（構はずに、しきりと繰返してやる。）えい、えい！　ほら、ね？

Ｂの様子が段々變になつて行く。

女　（瞳が段々輕蔑の色を帶びて來る。）ふん！

すると、女の顔がひどく憂鬱になつて、救はれない暗い影が彼女を包んで了ふ。

A　（愛情をこめて、ぢいつと、いぢらしさうに女を見てゐる。）

Bが段々舞臺の前へ出て來て、觀客席の方へ向つてやり出すと、幕が靜かに下りて來て、Bだけ幕の外に取り殘される。

（舞臺の照明は絞り込み。Bにスポット。）

B　（氣がついて、慌てて、）いかん。（引込み乍ら、）俺は又あの女に、人を輕蔑する事を教へて了つた。

Bは幕の中へ消える。（スポット絞り込み。）

（大正十五年十一月「文藝春秋」）

底本　日本現代文学全集　第67（新感覚派文学集）
著者　伊藤整　等編
出版者　講談社
出版年月日　1968